18

会　　誌

第 18 号

昭和 53 年 2 月

巻　頭　言……小 林 貞 作 1

研 究 発 表

1．氷河のノミ……新 井 康 平 3

2．卵白交換法の開発……大 田 保 文 5

3．富山県親司川のケイソウ……志 垣 修 介 9

4．富山県産シダ植物雑記……大 島 哲 夫 15

5．最近本県で知られてきた植物について……小 路 登 一 19

6．ヌマガヤ湿原の生態……本 多 省 三 25
本 多 啓 七

7．鼠が切歯（門歯）で物を齧る時の工学的考察……坂 下 栄 作 31

本 会 記 事…… 34

会 員 名 簿…… 35

編 集 後 記…… 39

富山県生物学会

巻　頭　言

会長　小林貞作

最近，ライフサイエンスという言葉をよく耳にする。これは本来生命科学と訳されているが，ちか頃ではもっと広義に解釈され，生命現象はもちろん，生命を長く維持するための生活科学という意味に使われるようになった。すなわち，人類を含めた生物の生命は，適正な環境下においてこそ正常かつ長い寿命を保つことができるのである。

そこで生命と環境とのかかわり合いが重要になってくる。環境とか条件とか言っても，これには多くの要因が包含されている。いずれにしても環境をある程度快適な方向へコントロールできる知恵を有するのは，人類のみである筈なのに，どこで狂ったのか緑りの生産者である植生を破壊し，多くの野生動物や昆虫などの減少または絶滅へ追いやった。工場等での加工製品としての無生物生産のため、あるいは自然植生地域への道路建設や乱開発のため，われわれの多くの生物仲間を瀕死の状態に，または惜しくも失ってしまった。気のついた現在となっては，すでに手遅れの感ではあるが，まだ遅くない。ライフサイエンスの台頭を機会に，人間生活と関係の深い汚染，公害のない緑りの環境づくりや野生動植物種との共存の実を挙げようではありませんか。

このたびここに，富山県生物学会誌第18号の刊行にあたり，会員諸氏の研究活動がいっそう発展していくことをご期待申しあげるとともに，本学会に対し格段のご協力の程をお願い申しあげます。